

研究実践報告

暮らし・学び・仕事が生を創る (1)

上田 和恵*・桑野 美帆*・三石 春香*

Daily Life, Learning and Work Make Life (1)

Kazue UEDA*, Miho KUWANO* and Haruka MITSUISHI*

はじめに

広島文教女子大学(現・広島文教大学)を卒業して13年経ち、教育学ゼミで学んだ同期生3人と「暮らし・学び・仕事」について座談会をした。

以下、座談会の内容と個人レポートである。

I 座談会

資料1：1回目(2023年8月1日)

B：今、何か悩み事はある？

A：悩み事はない。

C：これから大人になる子ども達の未来が心配。

Bちゃんは？

B：自分のキャリアをどう守っていくか。学校ってさ、意地悪な人が居るじゃん。今の学校にはそういう人は居ないんだけど、来年絶対転勤することは決まっているから、そこでそういう人が居たら働きにくくなって、仕事を休むことになったりすることになったら困るなあと思っているよ。

A：大丈夫。何とかなるよ。自分の話なんだけれど、勤務した学校で、全職員が一人一つ授業を見てもらうというのがあった。自分がその授業をする日、たくさん準備をしたのに、誰も見に来てくれなかった。「あんなに準備したのに～！」と腹が立ち、悲しい気持ちになった。でも、「そもそも授業は何のために、誰のためにしたのだったかな？」と考えてみた。すると、「目の前の子ども達のための学びのための授業であって、見に来てくれる先生達のための授業ではない。」と捉え直すことができたため、「子ども達のために授業の準備ができたから、それで良

かったんだ。」と気持ちを切り替えることができた。だから、何かモヤモヤしたことがあっても、「何のためにしたのか？」と目的に立ち返れば良いということが分かった。そうすれば、何でも何とかなるよ。

C：とてもシンプルで良い考え方だね。足を引っ張る人はどこにでも居るけれど、それに対して、いちいち反応をしない(相手にしない)こと、そういう人はBさんに何かあっても責任を取ってくれない人(無責任で自己中心的な人)なのだから、Bさんが堂々としていたら良いと思う。

※A・Bの対談(C：私用のため離席)

A：4年生の担任をしていた時、クラスに吃音のある男児がいた。その男児はお父さんを亡くしていて、兄は何でもできる子だった。自分が担任をしていた時は保護者とも信頼関係が築けて、その子の良いところをいっぱい伸ばすサポートができたかなと思う。でも、次の年、担任の先生に「椅子をガタガタするのをやめなさい。」と言われて、発作が起きたと聞いた。そういう困り感のある児童の助けになる仕事がしたいなと思ったけれど、なかなかそういう仕事はないよね。勉強を教えるというよりもそういうことを教えてみたいと思ったことはあるよ。その子は、今、大学生になっていて、特別支援の先生になりたいという目標をもって頑張っているんだ。(年賀状のやりとり)

B：その子にとって、Aちゃんが居てくれて本当に良かったと思うね。

資料2：2回目(2023年8月26日)

B：自分の学校の若手の先生と話をしていた時、「他の仕事をするなら何がいいですかね？」という話になって、「私、インターンか何か

* 公立小学校教諭(初等教育学科26期生)

で銀行で働いたことがあります。」と言っていた先生がいた。それに対して、若手の先生は、「良いなあ。私もOLみたいな仕事をしてみたいなあ。」と言っていた。銀行勤務経験の先生は「でも、学校みたいな感動はないから。」と答えていた。でも、どうかね？感動ある？日々。

A：日々は無いよね。

C：うん。日々は無い。

A：たまによ。

B：たまにね。でも、それだけ、キャリアを築いていきたいのかね？

C：どうということ？

B：前回会った時、キャリアを築いていきたいという話になったじゃん。確かに、細く長くやっていきたいという話はしたけれど、仕事として考えてしまっているかもしれない。

A：まあ、それも大事よね。

B：「教育に携わる人として大事なこと」みたいな志みたいなものは薄れた気がする。

A：それはあるよね。現場に居たら、どんどん薄れていくよね。

B：やっつけ仕事みたいな感じになっちゃうよね。

A：うん。現実的に、全部を全力ではできないもん。

C：結局できないことが多いよね。

B：本当に授業の準備なんてさ、働き方改革もそうだけれど、時間が無さすぎるよね。

A：うん。無さすぎる。

B：日々さ、何分取れてる？教材研究の時間。

A：無いよね。

C：週末にまとめてやるとか。

B：丸つけ・評価の時間さえ無いよね。PDCAとかさ。Pはどこ？って感じ。私は夏休みに溜まりに溜まっていた評価をやったよ。

A：前期と後期なんだね。

B：うん。前期と後期。これはいけないなと思いつつながらやったよ。夏休み、教科研や領域研とかある？

A：あった、あった。

B：だよ。今日、その報告会だった。私は総合と国語に所属していて、今日は総合の会があったのだけれど、その会で話しながら「これをするには、どれだけの時間をかけて授業を準備するんだ？」と思った。それに対して、学年主任が実現に結びつけるような質問をしてくれたのだけれど、「ちゃんと

考えられていないな。私。」って思ったの。

A：ふーん。何を？

B：理論の報告はしたけれど、それを実際に自分の実践に結びつけようとしていなかったなって。「報告、以上。」みたいな。全然つなげられていないなと思った。でも、話せば話すほど楽しいじゃん。「でも、これってどういうことだっけ？」と整理する、実践に結びつけてみる、知識をつけてみる、人と人をつなげる準備をする…やるのが膨大だよ。

C：そうだよ。総合、大変だよ。

B：今度、大豆を栽培するんだけど、「大豆百粒運動」って分かる？辰巳芳子さんっていう人がやっている「大豆百粒運動」を今年やろうと話しているんだけど、それをサイクルでやっていくという話をしている。難しいし、まだよく分かってないし、学校でやっていくことは総合だけじゃないじゃん。

C：そうだよ。総合だけじゃないもんね。

B：でもさ、話を聞けば熱くなるわけじゃん。「今、教育の大転換期。AIが入って、社会が大きく変わりますよ。まさに総合でその力を高めていける。」みたいな話になるんだよね。話は変わるけれど、私が勤務している自治体では、毎月、教科ごとに研修があるんだ。

C：そうなんだ。毎月？

B：そう。教科研・領域研があるよ。毎月、勉強会があって、一斉研って言って、一年間に一回、代表者が授業をするの。そのために、毎月集まって指導案検討とかをするの。私が勤務している自治体独自の取組で、教員の資質・能力を向上させようというねらいがあるらしい。私が勤務している自治体はそれを狙ってやっていたけれど、最近、校長とかによっては、「それは意味がない。もし、それで教員の資質・能力が上がるんだったら、全国に広がっているはずだ。でも、広がっていないということは意味がない。だから、やめた方がいい。」という考えの人もいる。でも、私が勤務している自治体はその取組をやめられないでいる。昨日の総合の研修に参加した時、指導要領を執筆された先生のお話を聞いたのだけれど、やってきた先生のお話を聞くのは面白いなと思った。「そうやってやれば面白くなるんだな。」っていう改善のヒントみたいなもの

- をもらえる。楽しくやっている人の熱量とかが伝わってくるし、本気で教材研究をやらないと楽しい授業ができないよなと思った。以前、先輩教員に「いくらでも力を抜こうと思えば抜ける職業だよ。」と言われたことがある。本当に何とかなるよね。失敗しても死ぬわけじゃないし、何十億とかそういうお金が動くわけではないから、自分達がやっていることが見えにくいしね。頑張りたいけれど、時間が足りない。要するに、時間がない。毎日、21時に寝るんだけど、頑張って深夜2時や3時頃に起きる。私は勉強しないと教えられないから、少し指導書を見たり授業準備をしたりする。それでも、不十分だなと感じる。これは地頭の悪さかな？
- C：それは違うでしょ。そんなことないよ。
- B：能力の無さをいつも痛感しながら、日々、仕事をしている。周りの先生達、頭が良い人が多いよね。
- A：うん。頭が良い人が多いと思うし、多才な人が多いと思う。いろんなことができる人が多い。
- B：Aちゃんだって、Cちゃんだって、多才よ。私、何もできない。
- C：そんなことないじゃん。
- A：私は子どもと一緒に虫を捕まえることを楽しめるよ。
- B：センスがあるよ。「センスっていう言葉は嫌な言葉ですよ。」と言っていた先生がいたけれど、昨日の研修で講師をされた先生は「センスっていう言葉は優しい言葉なんだ。」と言っていた。「センスというのは、子どもに興味・関心をもって寄り添ってやれる錬磨です。その積み重ねがセンスです。」と言っていた。また話が変わるんだけど、日々痛感する。
- C：何を？
- B：できないな。喋れないなど。
- C：いや、いっぱい喋ったじゃん。いろいろ伝えてくれたよ。
- B：そうかな？それは2人との関係もできていて、喋りやすさもあるし、2人に聞く力があるからだと思う。2人は、拙い私の言葉を拾って喋ってくれるじゃん。
- C：そう？全然拙くないよ。
- A：うん。
- C：具体的で分かりやすいよ。
- A：そうそう。
- B：…ていうのが、私の今。今、自分達は35～36歳。そろそろ、いろいろ任される年齢じゃん。実際任されている。嫌だな。責任と悩みと…また成長していくのかな？と思う。経験って言ったって、中途半端な経験しかないからさ。
- C：何年働いたんだっけ？
- B：14年？
- C：トータルだとそうだけれど、産休・育休があったからさ。
- B：5年働いて、2校目で1年半働いて、産休・育休に入って、時短をして…だから、全部で14年かな。
- A：私も5年働いて、5年休んで、2年時短して、2年担任をした…だから、担任が7年目。子育て中のお母さんはみんな同じだよ。歳だけ取っているけれど、経験を積んでいないから嫌だって言っている人が多い。しかも、子どもを迎えに行かないといけなから時間がないという状況に陥る。だから「仕事を辞めたい。」と言っている人が多い。Cさんみたいにいろんなことを経験して休むというのは良いなと思う。
- C：そうだね。いろいろ経験して嫌になった頃に休みに入るから良いかもしれない。
- A：働いて数年で休みに入った人たちは、波に乗っている時に休みに入った感じだからね。
- B：そう思う。半人前で育休に入ってしまったわと思ったよ。
- A：でも、長く休んだことは失敗だと思ってなくて、良いことだと思っている。長く休めるのは先生という仕事の良いところだなと思う。
- C：制度的には良いところだよ。
- B：だから、今、技を身につけなきゃという思いがあるんだけど、若手の先生達、すごく仕事ができるじゃん。
- A：そう。みんな、すごいできる。
- B：自分よりできる。
- C：でも、自分が産休・育休で休んでた分、若手の先生ができることが多いこともあるかもしれないけれど、産休・育休を経験して復帰した先生達の落ち着きが全然違うと思う。お母さんになって自分の子どもを育てて、体力的にもしんどい思いをして…。
- A：経験ってことよね。
- C：そう、経験。若手の先生からすると、広い心で働く復帰される先生の姿を見て圧倒される部分もあると思う。復帰された先生の

落ち着きを見て、「もっと勉強しなきゃ！」
と思う若手の先生もいると思うよ。

- A: みんな、無いものねだりって感じになるよね。
- B: 補い合えると良いのかな。
- C: 図書館司書の資格ってあるじゃん。他の業種だと、資格が多い方が給料が良かったり優遇されたりすることがあるけれど、学校って、できる事が多い先生の方が仕事を任されたり増やされたりすることがあるよね。
- B: あるよね。
- C: 自分は楽器演奏ができるから、どの学校に行っても、大抵、音楽系の活動の担当にされることが多かった。すると、放課後の指導に時間を割かないといけなかったり、休日も当たり前のように練習やイベントの引率に行かなければいけなかったりした。
- B: バランスよく仕事を振るのが管理職の役割なのよね。一部の人に負担が行って、一部の人が楽をするみたいな仕事の振り方はおかしいよね。
- A: 楽器ができる人は大変だよな。
- C: 年配の先生とか、若手の先生の倍以上の給料をもらっているのに働かない先生がいるよね。それはどうなの？って思うことが多々あった。
- B: 個別級をやっている時のベテランの先生が結構教えてくれる人で、「いや～、今回はボーナス100行かなかったわ。」と言っていた。定年退職間際の先生だったんだけど、「100って行くものなんですか？」と思ったことがあるよ。個別級でやっていた時、その先生が片手間にやっている感じで、「こんなに手が抜ける仕事なんだな。」と思った。
- C: 要領よく仕事をされる先生だったんだね。
- B: 次の学校ではその働き方は通用しなかったみたい。
いろんな先生がいるよね。意地悪な先生もいるし、勧誘してくる先生もいるし。
- C: 「いろんな」が幅広いね。意地悪だったり、勧誘だったり。
- A: どんな人が意地悪？
- B: 他にも、セクハラ、パワハラ。
- C: パワハラは居るね。セクハラは自分の身近には居なかったな。
- A: 意地悪な人って、どんな人なの？
- B: 人権的に問題な叱り方をする人。偉い立場の人だから許されることなのか、指導とし

て必要だからやっていることなのかなと最初は思っていたんだけど、周りの先生に聞くと「違うよ。あれは素でやっているんだよ。」と教えられた。

- C: 人権的に問題な叱り方って、例えば、どんな感じ？
- A: 人格を否定されたとか？
- B: 先輩の先生が後輩の先生に対して、子どもの前で、「何をやってるのよ！」と怒声を浴びせる。授業中に「この仕事、どうしてるのよ！」と教室に備え付けのインターホンで訴えてくる。初任校で意地悪だと感じたのは、朝会。経験年数が若い先生が時間を守れなくて、朝会に少し遅れてクラスの児童を連れて行くと、その出来事を境に、「あの先生はできない先生だ。」というレッテルを貼られ、周りの先生がその先生を見下すようになる雰囲気があった。レッテルを貼られたくないから、みんな、自分のクラスの児童を早く移動させるようになった。普通なら、階段で高学年と低学年が交差したら、低学年に「お先にどうぞ。」と譲ってあげるじゃん。でも、「我先に。」と先に行くクラスがほとんどだった。そういう雰囲気を見て、「こういう雰囲気、嫌だな。」と思っていた。あと、初任の頃、周りにいる先生達に分かるくらい、ある先生が特定の先生に対して当たりが強かった。「A先生はB先生に嫌われているんだな。」というのが周りの先生に分かってしまう雰囲気があった。
- C: 今までの学校で、自分もそういう雰囲気が分かる時があったな。
- B: そういう雰囲気がすごく嫌だなと思った。
- C: 社会の縮図みたいだよな。
- B: 人間関係で悩む人が多いじゃん。みんな、仲良くしたいよね。
- C: 子どもには言うのに、大人ができていないじゃん…と思うことがいっぱいあるよね。
- B: 去年、音楽会のことで揉めて、若手の先生が周りに責められるような立場になった。今年、音楽会の提案をその先生がすることになっていったんだけど、怖い雰囲気にならないように、今年の部会は責める先生が一人も入っていないメンバーにするという配慮があったんだけど…。意見がぶつかることがあるけれど、ああいうのを見ていて嫌だなと思う。必要な意見のぶつかり合いもあるけれど。授業研の時も似たような

- ことを思ったことがある。私達が若手の時は、ガンガン言われるのが当たり前はなかった？言われて当たり前。教えていただく立場、頑張って当たり前みたいな感じ。
- C：分かる。言われすぎて、自分が何がしたいのか分からなくなることがあった。
- B：そういうのも風土としておかしいなと思った。その人が一生懸命考えたものを何とかより良くしてあげようという気持ちが見えないような授業研というか。
- C：「攻撃」「粗探し」みたいな感じだね。
- B：個々の能力に任されている部分が大きくて、「そういう風土が嫌だね。」と話したこともある。教育現場に入ってみて、違和感を覚えた。衝撃やショックを受けた。
- C：Aちゃんは無いの？意地悪なことをされたとか。されている人を見たとか。
- A：あんまり自分は意地悪な人に会わないんだけど…。気づいていないだけなのかもしれないけれど、そういう人はいるかな。自分の住んでいる自治体で、「あの先生が来たら嫌だね。」という話題になる先生が居る。でも、関わったことは無い。
- B：学校に一人は居るよね。今は奇跡的に居ないの。今までで一番働きやすい学校。先生のなり手がいないよね。学校って。最低ラインで働いちャダメだよって思う。本当は心を燃やして、子どものために働きたい。
- A：毎週、水曜日くらいに子どもが登校しない日を作ってほしい。教材研究の日を作ってほしい。そうしたら、少しは心を燃やせるかもしれない。
- B：人の確保と時間の確保が必要じゃない？担任一人っていうことに限界があるよね。
- C：負担と責任が重たい。
- B：副担任にしたら良いかもしれない。
- C：でも、担任と副担任の仲が悪くなるかもしれない。教科担任ぐらいにしたら良いかもしれない。
- A：揉める人は揉めそうだよな。
- B：学年に一人くらい副担任をつけて、テストの丸つけ・成績処理・事務処理・学年だより作成とかのサポートをしてくれる人が居ると助かるかもしれないね。
- A：ほしいね。助かるよね。
- B：職員室アシスタントの学年版の先生が居ると良いよね。
- C：人手不足だからそういう人が来てくれたら嬉しいよね。
- B：需要も供給もあるよね。
- C：そこに予算をつけてくれないと人が入って来ないよね。教育にあまりお金を使ってくれない世の中だから。
- B：ボランティアでもやってくれる人がいると思うけど。
- A：教員補助員はいるよ。1年に2人、2年に2人、3年～6年にはつかない。だから、すごく頼りにしている。
- B：どうしたら良いんだろうね。
- A：人も足りないし、時間も足りない。
- B：それを放っておいているお偉いさん達が悪い。何も分かっていないよね。
- C：産休・育休に入って、余裕が出て、世の中のことについていろいろ調べるようになった。その中で思うようになったことがあるんだけど、人手不足・時間不足で困っている教育現場があること、心身の不調で休む先生が増加していることは知っているはずなのに働く環境が改善されないのは、そもそも改善しようとしていないんじゃないかということ。わざとやっている。先生達は賢い人が多い。先生達が世の中の課題に気づいて行動し始めたら大きな力になると思うけれど、わざと忙しい状況の中で働かせて、その課題に気づかせないようにしていると思う。教育にこそ、お金をかけないといけないのに、日本国民のことよりも他国にお金を流して、防衛費を増やして、さらに税金を国民から吸い取っている。先生達に世の中の課題に目を向けさせないようにしている。目の前の仕事・家事・育児で日々精一杯な状況にしている。課題に気づかないように、考えさせないようにしている仕組みになっていると思う。
- B：手遅れだよな。この前もニュースで教員不足を解消するために5億円投入すると言っていた。考えづらくしているってそうだよな。裁判があったよね。定年退職した先生達が国を相手に残業代が出ていないことを訴えたよね。
- A：先生の仕事って、手を抜こうと思えば抜けるから、残業代としてつけるかどうかって難しいよね。仕事の仕方によって変わってくるよね。
- B：仕事の仕方は違うけれど、仕事はしてるわけだもんね。
- C：サボっている人は一人もいないよね。

- B: いない、いない。手を抜くっていうのは、毎日、母業の具合だよ。お弁当作りとか。
- C: そうそう。仕事を全くしないわけじゃないよね。やる事はやっているから。
- A: 最低限が高すぎるよね。やればやるほどある。終わりがない。
- C: キリがないよね。
- B: やればやるほど、吹き出すよね。仕事って。
- C: 早く帰ったりすると暇なのかと思われて、役職をつけられたことがある。前の学校に転勤したばかりの時、早く帰るようにしようと決めて、最初の年はほぼ毎日18時まで退校していた。やることは朝早く行ってやったり、隙間時間に学年の仕事をしたりしていた。そうしたら、次の年に生徒指導主事と研究系の役職をつけられて、ほぼ全ての会議に参加しないといけなくなった。
- B: 会議の多さも問題だよ。
- C: 20代後半とか30代の先生が上の役職につくと攻撃されることが多いよ。
20代後半で研究主任をした時は大変だった。「文句を言うなら自分がやれば？」と思うことが多々あった。
- A: 「何でこんな仕事をしないといけないんですか？」って感じのことを言われることがあったの？
- C: 研究会とか、みんなでやらないといけないことなのに、自分だけが責められる感じの時があったのは辛かった。当時、管理職からパワハラもされた。教頭に机を蹴られたことがあった。
- A: 何で？
- C: 日付の書き方が違うだけで、「組織をおかしい方向に導こうとしている。」と言われることがあった。そういう些細な失敗を理不尽な言葉で責められることがあった。一年後、その指導について異議申し立てをした時、教頭に「誰に向かって発言しているんだ！」と怒鳴られて机を蹴られたことがあった。今の学校では生徒指導主事として赴任した。この学校でも足を引っ張る年配の先生が居た。働く大人に課題があるなど感じる。
- B: そうだよ。先生に課題があるよね。
- A: 課題は時間の無さだね。
- C: 余裕なく生活している先生が多いよね。授業のことよりも事務作業とかに時間が奪われていくよね。提出物が出ていない家庭に電話をかけたたり、アンケートを集計したりとか。
- B: 管理職が言っていたんだけど、「自分の仕事はほぼ雑用だから。」って。
- A: 提出物をチェックして、出ていない人に連絡するっていうのがすごい負担。
- C: 紙を失くしましたとかもよくあるもんね。手紙が多すぎるよね。
- B: 働き方改革で、手紙を直接配布するのではなくて、ホームページ上で載せられないかっていう話も出ている。配布する時間もカットできるし、確実に届くよね。
- C: 紙も無駄だし、メールとかにしてほしい。1年生って配るの大変だよ。
- A: 配るだけで時間がかかる。
- B: 配るだけの時間があるよね。
- C: 机の上にファイルだけ出させて配るとかね。
- A: 配ったの手紙が床に落ちているけれど、名前が書かれていないから誰のかわからないということも多々あるよね。今、1年制の担任をしていて幼保小連携をしているんだけど、幼稚園と小学校の間にもう一年欲しいって思った。保幼小連携のプログラムがあるけれど、小学校の先生と幼稚園・保育園の先生って、あんまり話さないじゃん。
- B: そのプログラムが進んでいて、私が勤務している自治体では年に1回、交流会があるよ。
- A: もっと遊ばせてやりたいけれど、一学期の間にひらがなをすごく教えないといけない。もっと幼稚園・保育園らしいことを一学期にできたら良いのになと思ったけれど、「あれもやらないといけない。」「これもやらないといけない。」と思うと、座らせていっぱい教える…みたいになることが多くて、「楽しく無さそうだな。」と思うことが多かった。
- B: 私が勤務している自治体はスタートカリキュラムっていうのを全面に押し出している。幼稚園・保育園の生活の流れを生かした小学校生活をさせようという取組をしている。
- C: 朝、遊ばせるんだよね。
- B: そうそう。学校で協力体制を作ってやるんだよね。
- C: 45分の授業を15分ずつ区切って短いスパンで音楽・国語・生活をやっていくみたいな感じだよ。
- B: 「1時間目」「2時間目」とかではなくて、「なかよしタイム」「ぐんぐんタイム」みたいな名前ですんでいるだよね。私が勤務し

ている自治体では推奨されてるんだよね。外国籍の子や発達障害のある子が多いから、短いスパンで活動する方が良いみたい。

C：入学してすぐに45分ずっと座りっぱなしって集中が保たないよね。

B：スタートカリキュラムを嫌う人もいる。「早く席に座る習慣・勉強する習慣を身に付けさせないと。」と考える先生もいる。文科省のホームページにも「スタートカリキュラムのやり方」みたいなのが出ていると思う。

A：いつくらいから普通に45分勉強するようになるの？

C：私が住んでいる県もやっているよ。今の自治体ではやっていない感じだけれど、前任校の自治体ではやっていた。朝から遊ぶんだよね。最初の頃は45分座りっぱなしというのはまずない。6月くらいから徐々に勉強の時間が増えていって…という感じだったと思う。

B：友達との関わりを増やしていく時間、自分の興味を広げていく時間、学習時間…みたいな感じで時間を組み立てていくんだよね。

C：椅子を円形に並べて、みんなの顔が見えるようにして、みんなで話す活動とかもあるよね。

B：でも、やったことはなくて、そういう取組があるって知っているだけなんだ。「スタートカリキュラムをやりたい！」と言っている先生が居て、良い先生なんだけれど、みんなに支持を得られない先生が居る。すごく知識もあって、ICTのこともよく知っている。研究主任をしている先生ですごく苦労されている。職員への周知や校長とのやりとり、研究の方向性…いろいろと悩みながら進めておられる。

全然話が変わるけれど、この3人で話をするのいいね。またやりたいね。

A：この前（8月）、3人で集まれてよかったよね。

C：今度は9月にやろう。

資料3：3回目（2023年9月29日）

A：管理職に見せる授業ではなくて、そもそも子ども達のための授業であるものなのだから、なぜ、そこに思いが至らなかったのか？という徳本先生からのご指摘に「確かに！」と思った。

でも、研究授業として管理職が設定したものだし、忙しい中で時間を作ってやらない

といけないから追われている感じが強かった。頑張ったから結果としては良かったけれど、誰からも見てもらえなかった（助言をもらえなかった）からプラスにならない。「見てくれないのはどうなの？」という気持ちはある。

C：そうだよね。だって、意図してやっている取組なのにね。子どものための授業というのは前提としてあるけれど、子どもにとって分かりやすい授業のため（授業力向上のため）の取組なら、「見に来てほしい。」と思うよね。

A：助言してもらいたかったのに、「何も無しか。」と残念な気持ちになった。あと、復帰して担任をもっていなかったから、自分の居場所みたいな…「必要とされていないんじゃないか。」みたいな感覚をもっていたかもしれない。

B：あ～なるほどね。担任と比べたらね。

A：管理職や各担任は忙しいから他の先生の授業を見に行く暇がないよね。でも、その当時はそういう疎外感みたいなものを感じていたんだと思う。

B：それは計画的にやってほしかったよね。その時間に見えなくなったのなら、違う時間に見に行くとか、5分ずつくらい見るとか決めて来てもらいたかったよね。

A：自分で「何月何日何時にやります。」って決めるの。だから、予定が被っていて来られない人も居るんだ。

B：管理職だけが見るの？

A：管理職は全然来ない。「同学年の人は行きましょう。」みたいな感じ。あとは、「空き時間の先生は行きましょう。」みたいな感じ。大体、同学年の先生は見に行くという雰囲気。

誰にも見に来てもらえなかったから、「私の外国語の授業なんて、勉強にならないよね。」と少し残念な気持ちになった。

C：外国語の専科をしていたんだね。すごいね。

A：専科で、外国語と理科を担当していたよ。全然専門的ではないけどねって感じ。

ピアノが全然できないのに音楽専科するのは気が引けると思って、予め、校長先生には「音楽専科はできません。」と伝えていたんだ。そうしたら、「外国語の専科をやってね。」と言われたので引き受けることにした。

A：対談①の「私が担任していた時、男児が机

や椅子をガタガタしていたか。」という話なんだけれど、私が担任していた時はしていなかったんだよね。その子も心理的に安定していた感じもする。家庭訪問の時、その保護者から「A先生に褒めてもらって我が子が喜んでいた。」「A先生なら安心です。」と声をいただいたから、良いスタートが切れたと思う。

- B: いいスタートだね。褒めるって大事だね。
 A: だから、ずっと安定していたと思う。その子の吃音について誰も馬鹿にする子は居なかった。その子が言っていたことで覚えているのが、多数決でみんなが意見を言う時、その子が「でも、少数派の意見も大事。」って言ったのが印象的で、それを褒めたことは覚えている。次の年の担任は少し冷たい感じの先生だった。
 C: 男性? 女性?
 A: 女性の先生。子ども達への関わり方を見て、少し冷たく感じるがあった。
 C: 読書の研究とかをしていて研究熱心な先生なんだろうけれど、冷たく感じる関わり方なのは勿体ないね。もしかしたら、子どものことをよく考えているかもしれないけれど、それが伝わらない関わり方は良くないね。
 B: 今の話を聞いていて思ったんだけど、担任が安心できる存在でいないといけないよね。親よりも長い時間を過ごすわけだもんね。家庭生活も大事だけれど、学校生活は長い時間集団で過ごすわけだから、安心して居場所になれる場所であるべきだよ。Aちゃんの雰囲気や生まれ持った安心できる…なんだろうね、その要素は。
 A: 楽しそうにしてるだけだね。
 C: 大事よ。
 B: その雰囲気があったから子ども達も安心して過ごせたんじゃないかな。
 C: 夏に話した時、Bちゃんが不登校について話していたよね。先生の影響で来にくくなることもある…みたいな話になったと思う。
 B: 先輩の先生で、冷たい感じの先生がいたんだよね。職員室で自分のクラスの子の話をしているのが聞こえて、いじめの加担みたいなことを先生がしまっているような印象を受けたんだよね。
 A: 冷たい先生の話トークをしたかもね。授業とかもできる先生なんだけれど、すごくクールで怒ったらすごく怖い先生がいた。ニコニコ

している場面もない先生だった。空気が読めない感じの子に対して、冷たく遇らう感じだった。「こういう感じを自分も変えられないんだよね。」と、その先生は言っていた。その子の周りの子達がだんだんとその先生のような雰囲気になっていってしまって、今年は保健室に午前中行ったり、休む日があったりしているみたい。先生はいろいろな人がいるけれど、先生と合わなくて学校に来れなくなったら人生変わるよな〜と思った。

- C: 本当だよ。居場所づくりをしないとね。
 B: それがトラウマで家から出られなくなる子もいるもんね。失敗体験も大事って言うけれど、成功体験を重ねないと自信がなくなっちゃうよね。
 C: Bちゃん、以前、「子どもへのサポート」について書いていたよね。
 B: 個別級の担任をしていたことと特別支援コーディネーターのことを書いたかな。
 C: その振り返りとして、今現在のサポートについてはどうかな。
 B: 今は事務的なこととケース会議にしか出ていないかな。
 C: 担任しているから、今はクラスでこういう子にこういう関わり方をしている…みたいなことがあるんじゃない?
 B: 今、頭抱えている。女の子なんだけれど、その子は1年生の時から教室を飛び出す子だったの。2年生で厳しい先生になって飛び出さないようにはなったんだけど、3年生になって私で…。甘えが出ている。その子にとっても居心地の良いクラスにした、友達との関わりをもたせたいと思っている。「これはやりたくない。」など、自分の思いは言える子で、本音を出せる関係性は作れているんだけど、なかなか上手く行っていない。上手く行っていないか何も経験談とか語れないんだけど、何を言えば良い?
 C: その課題に対して工夫していることとかある?
 B: その子にとって怖い存在がいるの。お父さんが怖い存在。だから、おうちの人には言ってほしくないみたい。だから、保護者と信頼関係を築くために、週に1回、学校での様子を連絡している。家庭の状況を見てみると、愛情が足りていないことを感じた。子どもの背景を知っていくことが大事だなと思った。背景を知った上で、どうい

う関わりをしていくと良いかと考えると、自分はその子にとって先生としての役割だけではなくて母親的な役割もあるし、友達的な役割もあるなど思った。休憩時間は一緒に遊ぶ、授業中は一緒に学ぶ、給食の時、話したそうにしていたら近くでご飯をたべる…そういう関わりをしているかな。

あとは、学年の先生に協力を得ている。一人で抱え込まないようにしている。初任校では、「担任王国」みたいな感じで、「全て担任がやる。」という風潮だったけれど、今はそういうのは古いよね。「チーム学校」だから、学年で各クラスの状況を共有して、「今、こういうことに困っていて…」という話があれば、学年主任が助言してくれたり、担任だけではなくて学年の先生でその子を見ていく動きをつくったりしている。担任の役割ではない役割を同学年の先生がしてくれている。担任はその子にとって甘えられる役、同学年の先生は少し厳しく指導する役みたいな感じ。

- C：一人で抱え込まずに、複数の目で見ていく体制だね。
- B：本当はケース会議とかをして計画を立ててその子にアプローチしていくべきなんだろうけれど、そんな時間もないしね。とにかく、その都度話して動いている。その場しのぎになっているのは良くないなって思う時もある。個別計画も立てているけれど、見直しとか修正とかもできていないまま日々過ぎていくから、そういうのをちゃんとしてあげないといけないだろうけれど、やっぱり時間がない。
- C：文字に起こして、書類にして、みんなで話すっていう段取りも大変だもんね。
- B：やれば整理もできて、みんなで共有できて、もっと上手く行くことも多いんだろうけれど、やっぱり時間がないよね。学年の先生以外にも専任の先生が飛び出す子に補充学習をしてくれている。その子の愛情不足の部分にもアプローチしてくれて、何気ない会話を通して、その子を認めたり褒めたりしてくれている。担任一人だけでは子どもを育てられないかと改めて感じた。みんな子どもを育てていかないとかなと思った。見え方もそれぞれ違うからね。担任していると、つい悪いところばかり見てしまう時がある。「本当はこうしたいのに」「こままで持っていきたいのに」と思っているも思

うように行かなくて落ち込むことがある。そういう気持ちを他の先生に話すと、別の視点からプラスの助言をくださったり、その子の良い一面を教えてくれたりすると、その子の良さに気づいたり、我に返れたりする。今、周りの先生にたくさん支えられている。

- C：特別支援学級って、教室に複数人の先生が居るから、複数の目で子どもを見られて良いよね。
- B：その子も通常学級の子なんだけれど、本人が特別支援学級に行きたいと言っていたことがある。でも、「あっちに行ったら遊べる。勉強しなくて良い。」みたいな甘えた気持ちで行きたいと言っている。本人の思いだけではなく、入級には保護者の同意も必要だけれど、その保護者は特別支援教育に対する理解が薄いから、「うちの子は通常学級です。」という感じ。特別支援的な支援が必要というよりも、その子にはまず愛情を与えることが大切な感じがしている。でも、これをすれば良くなるみたいなものではなくて、いろいろなアプローチが必要だと日々感じている。
- 今は、いろんな先生に支えられてやっている。初任校時代は、そう思えなかった。「自分一人でなんとかしなきゃ！」とっていて、専任の先生にさえ頼れなかった。今の学校では、「チーム学校」というみんなで支え合う雰囲気があるから考えが変わった。以前、論文に「お互い様の風土があった。」と書いていて、少なからず初任校にもそういう風土はあったけれど、それでも「学級王国」という感じも残っていた。
- C：少し離れて考えると寄り添えるけれど、実際にそこに居ると寄り添えないってことがあるよね。
- B：一緒になってやっていると冷静さを失いそうになることがあるよね。
- C：ある先生が子ども時代、自分の両親がよく「離婚だ！」と喧嘩をしていたそうで、そういう話が家庭で出ると不安になったり一人で考えたりしたと言っていた。学校の授業中に自分の家のことが心配になり、ボーッとしてしまっていた時、担任の先生に怒られたことがあるみたい。その先生は、「ボーッとしている子全てがただ集中力が無い子なのではなくて、家庭の事情が複雑で悩んでいる子の場合もある。ボーッとしている子ほど、何かを抱えている可能性が

あるから、その姿だけを見て怒らないようにしている。」と教えてくれた。それを聞いて、ポーッとしている子を見かけたら自分もすぐ注意してしまっていたなと反省した。

B: 言い方もあるよね。自分もすぐストレートに言うてしまう。今の学年主任の先生は言い方がすごく上手な先生なんだよね。ノリのいい感じの言い方で気づかせる感じ。基本「愛情」「優しさ」があるから、そういう関わりができるんだと思う。同じことを言うにしても、気持ちの良い伝え方ができるといいなと思った。

B: Aちゃんの特別支援の話に戻ってもいい？特別支援の理解が必要だよね。年度初めに「この子はこういう状況です。」っていうのを共有する時間ってあるよね。引き継ぎもあるよね。児童理解があまりできていないのかな。

A: 自分が担任した時、その子は机・椅子をガタガタしていなかったから、次年度の先生にそういうことは伝えていなかったんだよね。

B: もしかしたら、その子が机・椅子をガタガタしないといけないような原因の一つに、そうしないといけない状況につながる雰囲気クラスの中にあっただのかもしれないね。先生が作る雰囲気もあるかもしれないし、いろいろな児童の特性や個々に応じた対応の仕方を知っておく必要があるよね。

A: 自分の親戚の子に吃音の子がいる。その子が学校で先生に真似をされたことがあった。学年初めにその子の親保護者は学校に「吃音があるので、配慮をお願いします。」みたいなお願いを書いていたけれど、見られていなかったみたいで、「ちゃんと電話で言っていなかったから、口頭で伝えるべきだった。」と言っていた。その話を聞いて、その先生に吃音の知識がないのがおかしいと思った。その子は吃音を担任の先生に真似された時、「これはわざとじゃないんです。」と自分で先生に説明したみたい。そうしたら担任の先生はそれに対して謝ってくれたみたい。それを聞いてその子の保護者は「お母さんからきちんと先生に伝えておこうか？」とその子に確認すると、その子は「今回は先生が謝ってくれたから伝えなくて良い。」と言ったみたい。それとは別の時、その子が療育センターの先生に「学校で困っていることは何かある？」と聞かれて、

「喋り始めの言葉が伸びてしまったことをみんなの前で先生に注意されたのが嫌だった。」と話したことがあったみたいで、その件については療育の先生が学校にお手紙を書いて届けたみたい。手紙を読んで先生から保護者に謝罪と「もう少し早く教えてもらっていたら…」と言われたそうで、保護者が吃音についての詳細を伝えるのが遅かったからではなくて、担任に吃音についての知識がなかったことが原因ではないかと思った。吃音のことを知らない先生もいることに驚いた。

B: 通級の先生をしていた先生が特別支援を要する児童について知らない先生達が多いことを危惧して研修を開いてくれたことがあったよ。

A: 療育の先生の手紙にも「学校で児童理解研修を開いてほしい。」と書かれていたみたい。

B: 知識がない先生が意外と多いよね。どう対応したら良いかというのはある程度もっているかもしれないけれど、その子その子によって違うもんね。先生の児童理解って大切だね。

II 個人レポート

資料4：上田和恵のレポート

教育、自分のことを話すのは楽しいということを感じた。教育現場にいるが、先生たちと「どういう教育方針でクラス経営をしている」などという話をする場面はほとんどなく、毎日の起こることへの対処、授業準備、雑用を必死で行い、日々過ぎていく。今回、家庭、仕事の両立について話題にあがった。子どもを産む前に担任をしていた時期は、毎日遅くまで仕事をしたり、持ち帰って丸つけをしたり、土曜日でも学校へ行って授業の準備をしたりしていた。仕事に精一杯だった。産休、育休中は楽しみながらも子どもを育てることで精一杯だった。復帰前に思っていたことは、子育ても仕事も相当な力があることなのに両立なんてできるのかということだった。そして、育児短時間勤務の勤務体系で復帰をした。空き時間はなく、4時間授業をし、13時50分までの勤務だったが、結局は残業をしなければ授業を進めることはできなかった。残業をしても16時半には保育園に子どもをお迎えに行けていたので、育児短勤務として復帰できてよかったと感じている。今回話題にあがった両立についてだが、課題は教員の仕事

の多忙さ、時間のなさであると思う。勤務時間内にやるべきことが終わり、その足で子どもたちを迎えに行き、家に帰ることができるのであれば、子どもも私も気持ちにも時間にもゆとりがもてるのではないと思う。現在の状況としては朝7時20分には家を出て、保育園、学童保育に18時過ぎて迎えに行く。そして早く寝かすつけるために、急いでお風呂、夜ご飯をすませ、21時までには寝るといって毎日を送っている。子どもと家でほっと一息つく暇は平日には全くない。教材研究の時間が短く、楽しい授業ができていない。学級通信に載せたいことがたくさんあるのに、発行できていない。仕事も中途半端なのに自分との子どもの時間もあまりとれていないというのが現状だ。私は出かけることや季節の行事が好きで、休みの日には子どもと出かけ、楽しい思い出を作ってきた。やりたい仕事をし、大切な家族と過ごし、毎日充実している。幸せである。でも理想としてはもっと仕事をした、もっと子どもとゆっくり過ごしたい。「悩みはない」というのは本当か、と問われたら、悩んで苦しいということはないが、もっとこうなればいいのという思いはある。私には向上心がないと思う。現状維持を好むことが多くある。良く言えば現状の中でどうにかしたり、現状でどう楽しむかということを工夫したりするのが得意なのだと思う。また、教員の仕事を減らす、ということは私一人が求めてもしょうがない、変えることはできないだろうという諦めのような考えがあるのかと思う。同じような状況で働く教員仲間は仕事を辞めたいと話していた。私ももっと自分の子どもとの時間をとりた、と考えるが、学校で子どもと過ごす時間、子どもとつながっておくことが好きで、教員の仕事以上に感動のある仕事はないのかなと感じているため、辞めたいという考えには至っていない。中堅教員研修で、飲食店で3日間働いた。お客様の喜ぶ顔、ごちそうさまでしたという言葉などが、この職業の嬉しい場面かなと考えた。3日間では見えていないことがほとんどだと思うが、学校の先生の楽しさを改めて考えた。学校に戻り校長先生とその話をすると、飲食店に比べると、相手と深く関わるから、大変なことも多いけど感動も大きい仕事だと言っていた。苦労も多いが感動も多い。よい職業だと思う。

学校の研修で、専科だった時、授業を公開しても管理職の先生も空き時間だった先生も誰も来てくれないことがあった。私の授業は他の先生方が見るような価値がない、誰も期待してい

ないんだと落ち込んだが、何のための授業かと考えると子どもたちの成長、私自身の成長のために行った授業なのだから落ち込む必要はなかったと気付いたと話した。徳本先生は、そもそも子どもたちの成長、私自身の成長のために行く授業研究なので、なぜそこに思いが至らなかったのかという。確かに他の先生に見てもらったことが目的ではない。本質が見えていなかった。形式にとらわれ、自信がなく、他人の評価を気にしていた。褒められたい、認められたいという気持ちが強いのだと感じる。他人軸で生きるのではなく、自分の人生は自分のものだ、自分軸で生きることが大切だと理解しているが、それでもまだ、他人の評価を気にする部分が残っているのだと思う。人権の研修でダイバーシティについて職員で動画を通して学んだ際、その動画では様々な立場の人が出る中で、子どものいる女性が、子どもが小さいからという理由で大きな仕事を任せてもらえないと悩んでいた。ある独身の先生は、「子どもを育てるので大変そうだから仕事やりますよって思う。仕事任せてもらいたいなんて思う人いるのかな。」と言っていた。私も動画の女性と同じで、力をつけて仕事を任せられたいという思いがある反面、早く帰って家庭の時間を大切にしたいから仕事はあまり回さないでほしいという思いもある。改めて考えてみるととてもわがままである。立場は分かっているけどどんな風に考えているかは、分からないものであるということも感じた。

ゼミを通して自分について考えることができて、自分の弱い部分を考え不安な気持ちにもなり、また自分を理解できて晴れ晴れしい気持ちにもなった。またゼミの仲間、先生と話をしたと感じた。

資料5：桑野美帆のレポート

「働き方についての再考のきっかけ」

がむしゃらに働く20代を終え、産休育休を経て、子育てをしながら働いている。自分のため自分の子どものために、子どもたちのために働き続けることを選んだ際、今後年齢に見合った仕事を任せられ、若い同僚にも教えられる何かが必要だなと感じた。しかし、自分には若い同僚に教えられるものがないと思った。そこで、育休中に特別支援教諭2種の免許を取得した。当時任されていた家庭科という教科を熱心に勉強した。そして、復帰して担任に戻り2年目の現在も、まだ自分に自信がもてずに、何か自分の

強みを探し求めている。それが、2023年の夏休みのゼミでの「今、何か悩み事ある？」の問いになった。

「自信をもっていい」周りの方にはそのように言われることもある。自信のなさは、いつの自分にもまわりついてきた課題だ。どのように払しょくしてきたかは、自信をつけるための勉強、練習である。学生までは、勉強や練習をするだけの時間があった。現在は、十分に勉強するだけの時間はない。子育て、家事、自分の仕事。「きりがいいねえ。」「この（教員という）仕事で終わったためしある？」「仕事が噴き出すね。」は口癖のようにになっている。この教員という仕事には、多種多様の仕事の内容がある。いろんな仕事があるが、メインの仕事は、授業である。このことに何の迷いもなく、準備をしてきた。しかし、最近自分のそんな考えを揺るがすことがあった。

1つ目は、自分よりも5つ年下の同僚と帰りの道の話で、私の中に新しい風が吹いた。その同僚は、学校の先生に授業力を求めないと言う。同級生に学校の先生の思い出で何か覚えていることがあるかと尋ねたところ、「先生の楽しい雑談！」「先生の失敗！」などが並んだという。そして、また同級生に先生の授業で覚えているものがあるか尋ねたところ、「ない。」との答えだったらしい。同僚は「だから、私は最低限の指導書通り授業しかしません。授業の準備に時間はかけすぎません。」と断言した。その同僚は、怠けているわけでもなく、手を抜いているわけでは決してない。むしろ、毎週土曜日には学校に現れるし、自分の年齢に見合った仕事をこなし、自分なりに地に足のついた目標を掲げ、真面目に働いている。クラスの子どものこともよく見ている。そのような同僚も膨大にある仕事に割り切りを付けて、授業の準備は最低限という言葉になんだか感心してしまった。

2つ目は、親戚の叔父との話で、「できる先生って何？」と問われ、「いい授業をする先生。」「子どもに寄り添える先生。」と答えた。そして、続けて授業を考える際の悩みをぶつけた。「最近、個別最適な学びと協働的な学びを意識した授業とよくと言われるんだけど、一斉授業の中でやるのは難しい。そして、そのような授業をするには、考えるのにも準備にも時間がかかる。だから時間が欲しい。人材が欲しい。」ということ話をしていた。すると、叔父は「地域の元気の残っているおじちゃんみたいな人を使うシス

テムのあればよかるとにねえ。ボランティアでも子どもたちに関わりたい人は、何か教えたいって思う人は、いっぱいおると思うよ。」と言ってくれた。また、「一人でできることは有限。授業の準備する時間も有限。会社でも一緒けど、その集団がやりやすくするためにはどう環境を作ればよかかなって環境づくりに力を入れたがよかつやない？」と言ってくれた。「なるほど！」と思った。

夏休み中に再読した大村はま先生の「教えるということ」では、授業の大切さや教えることの大切さ、学び続ける教員の大切さ、子どもの力を付ける教員の大切さなどが書かれており、「そうかそうか。」と奮起していた矢先の話だったので、なんだか自分の頭を整理しきれていない。同僚と叔父やゼミ生2人の話を思い出しつつ、オンラインゼミで自分は、「手が抜ける仕事」と言いつつも「心を燃やして働きたい」と言っていたが、どこにどのように時間と労力をかけて、何のために頑張りたいのか考えていきたい。

また働き方改革で、様々な仕事が精選されたり、形を変えた仕事になったりする。「自分の家庭が大事。」「母の代わりはいない。」「今の時代は昭和のやり方ではウケない。」いろんな言葉をかけていただく。これからの教員には何が求められるのだろうか知りたい。

資料6：三石春香のレポート

オンラインゼミを通して、「教員の支持的風土の低さ」「担任の負担が大きいこと」「私生活が犠牲になっていること」などの課題が挙げられた。それらの課題は全て「時間の無さ」「人手不足」に起因していると考えている。

まず、「教員の支持的風土の低さ」だが、これも「仕事量の多さ」「時間の無さ」「人手不足」が引き金となり、教員一人一人の精神的・時間的な余裕が奪われていることから、周りの教員や目の前の子どもに対して余裕をもった行動ができないのではないかと考える。

資料2で、桑野さんが学校での教員の言動について触れている。分掌担当の教諭の企画・運営状況に不満があった場合、その担当教諭を「これどうなってるのよ！」と怒鳴りつける先生がいること、集会で時間に遅れて集合したクラスの先生は「できない先生」というレッテルを貼られる雰囲気があること等である。これらの内容を聞いて、自身も12年の教員生活の中で少なからず「相手を攻撃することで自分を保とう

とする雰囲気」「自分を正当化しようとする雰囲気」を感じ取り、違和感を覚えた経験がある。私も同じように、初任の頃、この現実を知ってとてもショックを受けたことを覚えている。

「いじめを許さない」ということは、どの先生も子ども達に伝えることであるのに、教員の中で「あの先生はできない人だ。」「あの先生の言うことはおかしい。」と捉えているような発言や態度がとても気になった。そのような教員ばかりではないし、常にそのような雰囲気であるわけではないが、どの職場でもそのような雰囲気を感じるがあった。

次に、「担任の負担が大きいこと」についてである。

どの学校の先生も、決まった時間の中で到底終わらない仕事量を抱えていると言っても過言ではない。授業や給食指導だけではなく、テストやプリントの丸つけ、欠席児童等への連絡、アンケートや回収物の処理、学年・学級通信づくり、行事の企画・運営、会計、研究授業の準備、会議、地域との連携、登校指導等、多岐に渡る。

教育委員会から教員の長時間労働を度々指摘されるが、その対応策が「週に一度、定時退校日を設けて、教員を早く帰宅させる」ことが一般的である。早く帰ったところで、残っている仕事を持ち帰らなければならないため、家でも仕事をする事になり、学校での労働時間が短縮したように見えているだけで、実際のところ、何の対策にもなっていない。長時間労働の課題を「時間の使い方が上手くないから」「優先順位が分かっていないから」と個人の課題であるかのように捉えられる場合もあるが、そうではない。勤務時間内に終えられない程、一人一人が抱える仕事量は多い。勤務時間内に終わらないからと言ってサボっている先生はほとんどいない。目の前の子ども達のために懸命に働いている先生ばかりである。

最後に「私生活が犠牲になっていること」についてである。これは、「担任の負担が大きいこと」でも述べているが、勤務時間内に終わらないということは私生活にも多大に影響を与える。

自身も独身時代、仕事を持ち帰って仕事をしていた。休日は、終わっていない仕事、音楽発表会で弾くピアノの練習、研究会の準備、地域行事の準備やボランティア、ブラスバンドや合唱団の引率等に充てることが多く、それ以外の時間が自分の自由な時間として使えた。

家庭のある先生は、毎日、子どもの迎えや家

事等で早く帰るために、終わっていない仕事を持ち帰り、子どもが寝静まった後に仕事をしていった。

ほとんどの先生が私生活を犠牲にしなければ終わらない仕事をしているため、「他の先生もしていることだから」「子ども達のためだから」「このくらいやって当たり前」と私生活を犠牲にして仕事をしているのではないかと思う。

以上述べてきた「教員の支持的風土の低さ」「担任の負担が大きいこと」「私生活が犠牲になっていること」の共通する課題は、「仕事量の多さ」「時間の無さ」「人手不足」であると考えられる。どの先生も目の前の子ども達のために最善のことをしてあげたいという思いをもっているが、一人では限界がある。また、限られた時間の中でやらなければならないことが多いと、してあげたいことよりもやらなければならないことに時間を割かなければならず、結果として私生活を削って捻出せざるを得ない状況である。

時間に終わり、たくさんの仕事を抱えた状況にしていると、だんだんと「こなすだけ」になってしまう。自身も「時間の中でいかにたくさんの仕事を終わらせていくか。」に重きを置いて、ついつい「こなすだけ」になってしまった経験が多々ある。子ども達にとって意味のあるものにするためには、十分な時間が必要である。

教員の多忙な働き方が改善されれば、今よりももっと子ども達との時間を大切にできるのではないか。先生達が精神的・時間的に余裕がもてれば、今よりももっと目の前の子ども達にしてあげられることがあるのではないか。教員の働き方を改善することは子ども達のために必要不可欠であると考えられる。

終わりに

教職に就いて10年以上経過した教育学ゼミ同期生3人が毎月オンラインで集い、「暮らし・学び・仕事」について対談をした。このようなテーマでじっくりと話をしたのは大学を卒業して初めてである。在学中の教育学ゼミでの学びが生きた対談となった。

私達3人の経験や思いの発信が、学校現場で働く人だけではなく様々な立場の人に届き、日本の教育に限らずあらゆる課題を解決する一助となれば幸いです。

課題解決の一助となればという思いで、今回、対談を発信しているが、個人の特定を避けるため、対談者をアルファベットで表記することにした。

今後も集い、語り合い、発信を続けていきたい。

付記 (Bより)

座談会の冒頭にあった悩み事が長い年月を経て、ようやく解消することができました。

教員として働き始めてずっと違和感だった職員間の人間関係や多様なやりとりには、目的があり意図的であったことに14年の時を経て気づくことができました。

その機会となった出来事。現任校での教職員との出会いに感謝します。また、初任校でも叱咤激励を送り続けてくださった職員の皆様にも感謝の気持ちでいっぱいです。

14年間の勤務で払しょくできずにいた違和感、それは学生時代までに仲間とつながり協力する大切さやすばらしさを教え育てくださった方々のおかげで感じる事ができたものです。私に関わってくださった皆様に感謝しています。